第二十講・豊かさのゆくえ（説明文）

一題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本のモノづくり産業が世界チャンピオンになるにあたっては、アメリカやイギリスの年老いた元チャンピオンを、次つぎと打ち負かさねばなりませんでした。審判（しんぱん）の見守るリング上で、人一倍の練習できたえた日本選手が相手をノックアウトした、とみる人もいるでしょう。また逆に、アメリカやイギリスの元チャンピオンが、日本の若手（わかて）選手に道をゆずってくれたにすぎない、とみる人もいます。

どういう世界であれ「①後進に道をゆずる」という思いやりの風習があるからこそ、世代の交代がスムーズにかなえられるのだし、またモノづくりの現場に若い活力がみなぎるのです。人間の場合には「寄る年波（としなみ）には勝てない」などといわれるように、個人差はあるものの、体力そして知力とも、年齢（ねんれい）とともに確実に衰（おとろ）えてきます。だからこそ、会社や官庁（かんちょう）には定年制がしかれていますし、また、来るべき高年齢化社会をどうするか、という問題が深刻（しんこく）に問われたりもするのです。

一国の経済（けいざい）的な力もまた、国の年齢とともに衰えたりはしないのでしょうか。もし日本のモノづくり産業の強さが永久につづくならば、韓国（かんこく）、台湾（たいわん）、香港（ほんこん）、シンガポール、タイ、中国（ちゅうごく）などの「後進」国・地域（ちいき）はいったいどうなるのでしょうか。いつまでたっても、これら諸国（しょこく）・地域は日本の＊後塵（こうじん）を拝（はい）しつづけなければならないのでしょうか。

繊維（せんい）、自動車、鉄鋼（てっこう）、造船などの分野で、日本が②世界選手権（せんしゅけん）を制覇（せいは）したのは、七〇年代前半のことでした。なぜ日本の製造業がさまざまな産業分野でチャンピオン・ベルトを手にすることができたかと

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いうと、一つには、日本の労働力が相対的に安かったこと、すなわち日本人労働者の給料がアメリカ人やイギリス人のそれにくらべて安かったことがあげられます。ロボットによる生産の自動化が進む以前には、モノをつくるには人手が欠かせませんでした。原価に占める労働賃金の比率が高いモノづくりにとっては、まじめによく働いてくれる人手を安く使えることが、国際競争に勝ちぬくための、きわめて有利な条件となるのです。欧米諸国に比べての低賃金こそが、六〇年代末の日本の製造業の躍進ぶりを説明する、第一の理由なのです。

もう一つの理由は、日本の製造業のもつ高い技術力です。六〇年代の日本の技術者の課題は、新しい技術を開発するというよりも、欧米に「追いつき追いこせ」すなわち欧米のモノづくりを忠実にまねることだったのです。こうしたタイプの技術開発は、受験生が教科書や参考書の内容を丸暗記して、入学試験の問題を解くのに似ています。いってみれば、「追いつき追いこせ」型の技術開発は、③日本の得意技のひとつだったのです。こうして、いったん技術的な格差が埋められてしまうと、安い□というメリット＊が生きてくるのです。

七〇年代も後半にはいると、日本製の自動車や電化製品の性能のよさが際だつようになりました。「追いつき追いこせ」を卒業した日本の技術者は、独創的な製品改良技術を次つぎと生みだすようになったのです。たとえば自動車のガソリン一リットルあたりの走行距離を伸ばす、冷蔵庫の消費電力を大幅に削減する、半導体の記憶容量を増やす、ビデオやファクシミリの値段を下げる、などなどの改良が、日本人技術者の手によって相次いで成しとげられたのです。

〈佐和　隆光「豊かさのゆくえ」より〉

＊後塵を拝す＝後れをとる。
＊メリット＝利点、有利なこと。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(1)　――線①「後進に道をゆずる」とありますが、これがスムーズに行われるための社会制度の例を、文中から漢字三字でぬき出しなさい。

(2)　――線②「世界選手権を制覇した」とありますが、それが成しとげられた理由を二つ、それぞれ二十字以内で答えなさい。

(3)　――線③「日本の得意技のひとつ」の具体的な内容を、文中から十七字でぬき出しなさい。

(4)　□にあてはまる言葉を文中から三字でぬき出しなさい。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(5)　本文の内容としてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　日本の製造業は、七〇年代前半にアメリカやイギリスを追いぬいて世界一になった。

イ　製造業が国際競争に勝ちぬくためには、安い労働力というものが有利な条件となる。

ウ　かつてアメリカやイギリスにおける労働の賃金は、日本のそれにくらべて安かった。

エ　日本の産業が世界一になったのは、イギリスなどが日本に道を明け渡したという見方もある。

□

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講・確認テスト

次の中から名詞でないものを選びなさい。

１　ア　二人　イ　東京　ウ　でも　エ　算数

２　ア　見る　イ　ねこ　ウ　羊　エ　かえる

３　ア　理由　イ　こと　ウ　時　エ　動く

４　ア　はなし　イ　動き　ウ　すごく　エ　走り

５　ア　大きさ　イ　喜び　ウ　美しさ　エ　うれしい

ⒸRECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講　豊かさのゆくえ（説明文）

一題目

(1) 定年制
(2)（例）日本の労働力が相対的に安かったから。
（例）日本の製造業のもつ技術力が高かったから。（順不同）
(3) 欧米のモノづくりを忠実にまねること
(4) 労働力
(5) ウ

〈確認テストの解答〉
1 ウ　2 ア　3 エ　4 ウ　5 エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。